
ハルケギニアの錬金術師

楽園のメタファー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルケギニアの錬金術師

【Nコード】

N4334N

【作者名】

楽園のメタファー

【あらすじ】

大学院生がゼロの使い魔に転生。

前世の知識を利用してゲルマニアで領地経営に乗り出します。

第一話

俺にも何がなんだか良く分からないがとりあえず理解できる範囲で自己紹介をしようと思う。

俺の名前はベンノ。性別は男。年齢は0歳。……らしい。

なぜ自分のことなのに断定じゃないかというと、気がついたらベツドの上において知らない二人が俺をあやしている。

不思議に思って周りを見渡してみると全くもって身に覚えがない部屋。

そして極めつけは俺の体だ。首は上手く動かないし、動かした手足もかなり小さい。

……どう考えても赤ん坊の姿だ。

一四歳一

さて、この四年間で分かったことをまとめる。

俺はゲルマニアという国の貴族の長男として生まれたらしい。

父親はブルーノ・フォン・アーベル。

土のスクエアで侯爵。豪気な性格で大雑把な面が見受けられる。

皇帝のお気に入りでなかなかのエリートらしい。

母親はアンナ・フォン・アーベル。

土のトライアングル。やや世間知らずな感じがする。

ゲルマニアという国で分かったのだがゼロの使い魔の世界に転生したようだ。

さて、それでは前世の紹介もしておこうか。

俺は大学院生をしており、経営学を学んでいた。

専攻は会計だったが、興味の尽きない俺は経営戦略や企業支援に加えて経済学も独学で学んでいた。

性格は自分で言うのもなんだが内向的。

というより研究肌とでも言うべきであろうか。

本を読んだりネットで調べたりと勉強することが多かった。

その際にたまたま目に留まって読んだ本がゼロの使い魔である。

で、今何をしているかというと

「父上、本を読みたいのですが」

「またか。昨日お前に渡した本で最後だ」

「どうやら父はあまり本を読まないらしく、蔵書が早くも尽きてしまつたらしい。」

「それでしたら新たに買えばいいではないですか」

「…本は高いのだ」

「どうやら此処では本の値段は相当なものらしい。」

「中古本でも構いませんし、他の方から借りてみては？」

「分かった。用意しておく」

「そうですか。ではお願いします」

「他に欲しいものはないのか？」

「余裕があれば羊皮紙とインクの予備を」

父がため息をつく。…なにか変なことを言っただろうか？

ワシがお前の歳の頃には…と独り言を呟き始める。

豪気であるが、愚痴っぽいのが父の欠点だ。

俺は足早に父の部屋を出ることにした。

その日の夕食

「ベンノ、また父に本をねだったというのは本当?」

父から聞いたのか、母が尋ねてくる。

「はい、本当です」

嘘をつくことでもないので正直に答える。

「あらあら、ベンノはお利口さんねえ」

相変わらず母は天然っぽい。

「だが：ちよつと極端ではないか」

父が心配そうに言う。

「あら、あなたは反対なの?」

「いやそういうわけではないが：」

父は母に頭が上がらない：というより母の性格では逆らうだけ無駄である。

夫婦円満なのはこれのおかげだろう。

「大丈夫です父上。無理しているわけではありません。本が好きなだけですから」

おそらくだが、俺が爵位と両親のことを気にして無理をしていると父は考えている。

俺はそんな高尚なことを考えているわけではなく、ものめずらしさと原作知識の確認のため本を読み漁っているだけである。

前世の本好きも関係あるかもしれないが。

「あなた、ベンノは大丈夫よ」

「う、うむ。そうだな」

どうやら父も理解してくれたようだ。

これで安心して本が読める。

そう胸をなでおろしたベンノはやはり本の虫だった。

一五歳一

俺はワクワクしていた。

今日初めて魔法を習うからである。

教師はカールという中年の男性である。

彼は土のスクエアで昔は軍の最前線で戦っていたが、今はもう引退して家庭教師として働いているらしい。

両親と知り合いらしく父が頼み込んだそうだ。

土のスクエアを呼ぶあたり俺の属性は土だと確信してるようだが、俺が違う系統だったらどうするつもりなのだろうか？

両親が土の系統だからと言って、俺も絶対土の系統とは限らないぞ…。

とにかく授業だ。

「魔法で大事なことはイメージです。このことを忘れないように」

「では、まず属性の確認も兼ねてブレイドから教えます。ブレイド」
スツと杖から茶色い刃が伸びる。

うーん、質量保存の法則とか完全に無視してるなと内心苦笑いしながら見つめる。

だからこそ魔法というのだろうか。

「同じようにしてみてください」

「分かった。ブレイド」

…出てこない。

失敗したかと思ったがよく見たら、杖からほんのり茶色い刃が見える。

才能無いのかな…。

「……小さい」

「焦ることはありません。ご両親と同じ土の属性ですし、練習すれば優秀なメイジになれますよ」

「そうだね」

俺はこの時魔法に励む決意をした。

一六歳一

あれから一年間、俺はカール先生に魔法を習い、コモン・マジックは一通り使うことが出来るようになった。

他の子どもと比べたことがないからよく分からないが、そんなに覚えがよいことだけは分かる。

カール先生の授業が終わると習慣になっていることを始める。

「ねえ、今日は何の話をしてくれるの？」

「今日はなあ：オーク退治の話をしようか」

カール先生の話をお聴くことである。

といつても軍属だったせいかなほとんど戦争とか退治の話が多い。

カール先生のお話を聴き続けて思つたのは

「先生：やっぱりメイジが魔法だけしか使わないのって危なくない？」

「そうだなあ：」

メイジの弱点が意外に多いことだった。

まず精神力が切れたり杖が無いと魔法が使えないこと。

次に接近戦に弱いこと。

最後に平民には絶対勝てると思つてゐること。

この三つを克服しないとダメだ。

俺は強く思つた。

「：ということでお剣を習いたいのですが、父上」

「何が』ということで」か分からんが別に構わんぞ」

豪気な父はこういうことでも気にしないので助かる。

メイジが剣を使うことに白い目で見ることが多いからなあ…。

「あらあら。まあまあ」

母だけはいまだによく分からない…。

第二話

一七歳一

「せいやっ！とあっ！！」

ただ今、剣の訓練の真っ最中である。

あれから剣を教えてくれえる人を探して一年間励んできた。

「脇が甘い！！」

「ぐはっ」

見方を変えれば俺が一方的に叩かれているようにしか見えないだろうが。

一年ごときでは勝てるわけがない。

分かってはいたが悔しい。

「十分休憩」

「あー、体いてえ…」

呻きながら地面に転がる。

「少し聞きたいことがあるんですが…」

そう言ってるのは俺の剣の師匠であるエリク。

三十そこそこの男だが傭兵を長くやっており、剣の扱いも上手い。

「んー？ いいよ」

俺は体を起こしながら言う。

「どうしてメイジなのに剣を習うのですか？」

「魔法は完璧じゃないからね」

「……そんなことを言うメイジ初めてです」

驚いた表情のエリク。だが俺は事も無げに言う。

「初めてじゃなかったら師匠は死んでますよ。メイジ殺しでも剣の使えるメイジには敵わないでしょ」

「私がメイジ殺しとご存知で雇ったのですか？」

「わざわざメイジ殺しを雇ったんだよ」

「やっぱり変わってますねベンノ様は」

「自覚しているけど人に言われると少しむかつく」

「さて時間です…構えろ！」

「ちょっと待ってええええええ」

俺の嘆願もむなくこの日は痣だらけとなった。

「では、今日は錬金を教えます」

錬金といって思いつくのは『鋼○錬金術師』である。

前世ではかなり好きで、アニメと漫画の両方を見ていた。

ハガレン好きとしては是非マスターしたい魔法である。

「錬金する物質をイメージして：イル・アース・デル」

石ころが錫に変化する。

なんとも素晴らしい魔法である。

俺は見ながら思索にふけっていた。

（錬金術は錬成だけで石ころを金に変えられるんだから、魔法だっ
たらどうなるんだろ）

「：ンノ様。ベンノ様」

「ん？ ああ：ゴメン。イル・アース・デル」

俺は考え事をやめて錬金をかけたが、イキナリのことだったので最初に頭に浮かんだ物質をイメージしてしまった。

「これは…鉄ですか。しかも鋼も混じってますね」

「そうなの？」

「ええ」

鋼をイメージしたのだが鉄をメインに錬金したようだ。

どうやら実力不足らしい。

（そういえば国家錬金術師レベルじゃないと金の錬成は無理だっけ）

「ということは失敗？」

「いえ、イメージの問題でしょう。集中すれば問題ないかと」

さっきは集中してなかったからなく。

「それに喜ばしい報告が一つ」

「え、何？」

「ベンノ様はラインレベルの實力をお持ちのようです」

「どういうこと？」

「鉄を錬金するにはライン以上でないと無理なのです」

マジかよ!?! いつの間になったんだ?

授業の後汗を拭いていると

「ベンノ。ラインクラスになったというのは本当か?」

父がいきなり現れて尋ねる。

「はい。本当です」

「そうか! では今夜はお祝いだな」

「え、ちょ…」

俺は止めようとするが父はすでにいない。

「料理長!! 今宵はパーティだ」

嬉しそうな声が響き渡るだけだった。

「あの人ったら…」

母よ…いや、何でもない。

諦めることを覚えたベンノであった。

一八歳――

あれから得意になった錬金に磨きをかけ、様々な物質を錬金し続けてきた。

「イル・アース・デル」

「純度がかなり上がりましたな」

今日は銀を錬金していて、カール先生には完成度のチェックをお願いしている。

「これって売れないの？」

「流石に純度が足りませんね。不純物が多すぎます」

「じゃあ…イグジトラクション。これでどう？」

「ちょっとお待ちを……確かに天然と銀と見分けが付きません。一体何を…？」

「さっきのは抽出の魔法。銀と不純物を分けたんだよ」

そういつて銀から切り離した不純物を見せる。

「しかしオリジナル魔法とは…」

俺は慌てて誤解を解く。

「いやいや違うから。ディテクトマジックの応用だから全くもってオリジナルじゃないから」

といっても、錬金が原子配列変換ことを理解しているからこそできることだ。

科学知識と魔法の融合によってのみ成し得る技である。

「これならば売れると思います」

「それなら：イル・アース・デル」

俺は銀を変形させ、食器の形に錬金し直す。

物質の変形はほとんど精神力を消費しない。

「銀食器ですか」

「これなら売りやすいと思ってね。家に出入りしている商人に聞いてみるよ」

後日、この食器はかなりの高値で売れた。

錬金の練習も兼ねて銀製品の生産を始め、アーベル商会というブランド名で販売した。

「参ったな…」

「どうしたのですか、父上」

珍しく父が困っている様子だったので驚いて声をかけた。

「ベンノか…年々税収が下がってるんだ」

「天候不順でもあったのですか？」

「いや、そんな報告は無いが」

俺は考え込む。そして、

「少々アイデアがあるので任せてもらえませんか？」

「む…うむ。では任せた」

父は適當すぎるのではないかと疑問に思いつつ、俺は農家の見回りに行く。

「これは貴族様…。今日は何か御用で？」

「あー、頭下げなくていいから。」

農作物の出来が悪かったみたいだけど、天候不順とかあった？」

「いえ…そんなことはありませんでしたか」

「ちなみに道具ってどんなの使ってる？」

「えっと、木製の鍬です」

「そうか…ちょっと畑見せてもらおうから」

「は、はあ。どうぞ」

土を手にとって確かめてみる。

予想通り土の栄養が不足しており、作物が十分に育たない土壤になっている。

原因は土地を休ませないことだろう。

アーベル家は土の系統だから両親が魔法で改善しているのだろうが、

土地が広すぎて追いついていない。

俺は部屋に戻って計画書を書く。

- ・ 備中鍬を錬金で作って無料貸与し、三年で交換
- ・ 大麦↓クローバー↓小麦↓かぶの順に行う農法
- ・ 肥料の作成方法 e t c …

ここで俺は重要な事に気付き、父の部屋に行く。

「あのー父上」

「なんだ？」

「俺だけでは税金について何もできないのですが」

領地のことは父が仕切っており、俺単独ではどうしようもない。

人がいなければ何もできないのだ。

「ん？私に書類を出せばそれでいいぞ」

「あ、そうですか。……いやいや、それでも人材は欲しいのですが」

「そのことならば問題ない」

「え、ということですか？」

と、そこにノックの音。

「入ってきなさい」

「失礼します」

入ってきたのは数名の若い男たち。

九歳の俺のほうが充分若い。

「お前たちにはベンノの補佐役を頼みたいと思う」

男たちは戸惑う。よく言えば若手。悪く言えば下っ端。

それなのにいきなり次期当主とも言える方の補佐役。

その次期当主候補もまだまだ子供だが。

しかし命令は命令である。

「かしこまりました」

俺はというと。

「そういうことでよろしく」

こうして俺は領地の改革に取り掛かる。

あれから別室に集まり

「それでこの計画についてどう思う？」

と、単刀直入に聞くが反応が鈍い。

「あのーアーベル様。この計画にはこういった効果があるのでございませうか」

しかし、その中の一人が恐る恐る聞く。

「いい質問だ。だがそれに答える前にこちらから言っておくことがある。」

まず公的な場面を除いて俺には無駄な敬語は要らないし、言いたいことはハッキリ言うこと。

呼び方もベンノでいい」

啞然とする男たち。

反応がないので一応確認する。

「わかったか!!」

「「は、はい」「」

「それでさっきの質問だが。」

一つ目は能率化の向上すること

二つ目は休耕地がなくなること。

三つ目は作物の育ちがよくなること。

ちなみに肥料の作り方は灰や骨粉や家畜の糞を混ぜればいい」

「しかし、鋤を無料で貸与というのは厳しいのでは…」

「鋤を無料貸与する代わりに、それぞれの村長に命じてその村の詳細な地図を描かせるつもりだ。」

それに税収が上がれば回収できる予定だ」

早速この計画を始めたがこの年の税収は上がらなかった。

第三話

—十歳—

「残念ながら税金は上がりませんでしたな」

「そう早々と上がるものでもない。長期的な視点に立つことだ。

それまでは違う方法で稼げば良い」

もはや定番となった家臣たちとの会議。

俺の提案が多いのが気になるが、家臣たちからの指摘に気付くことも多い。

「違う方法とは…？」

「商売だ」

アーベル家の一室にギルドの幹部たちが集まっていた。

「ギルドの幹部の方たちにはこの事業の経営と投資をお願いしたい」

「経営と投資…？」

「経営というのはそのままだ。事業の責任者として働いてもらう。給料は固定給と成功報酬。」

投資というのは事業に出資し、利益が出た場合にはその一部を出資額によって受け取ることができる。

無論、失敗した場合は戻ってこないがな。尚、各事業の出資の半分は俺が受け持つ」

この出資で俺の銀製品の売上はほぼ消える予定だ。

ガヤガヤと話合う幹部たち。

反応を見る限り感触は悪くない。

「まずこれを見て欲しい」

そういつて書類を渡す。

「これは…？」

「俺の考えた事業計画書だ」

そこには前世の銀行・派遣業（傭兵）・飲食店・製紙業・不動産業
etc…のあらゆる産業を

ハルケギニア風に改造した事業が詳細に書かれてある。

この事業をハルケギニア風に変化することができたのは家臣たちのおかげだ。

俺の知識ではまだまだギャップの多いところが目立っていたのだ。

パートタイマーや株式会社などこの時代に存在しない言葉は、名前を適当に変えて分かりやすく説明している。

幹部たちは頭の中で計算しすぐに答えを出した。

「この計画に賛同します」

これがアーベル商会の始まりである。

この計画は成功した。

俺と家臣たちの作った事業計画書とギルドのメンバーの経験。

これが上手くマッチしたようでなかなかの利益が出ている。

この利益があれば色々な開発に取り組めるはずである。

俺は早速準備した。

「連射できる銃など聞いたことが無い」

「エンジン…といったか？初めて見るなあ」

ガヤガヤと議論しているのは銃とエンジンの研究と開発をするために俺が集めたメイジたちである。

というのも、タルブに向かい『竜の羽衣』を買い取った。

ゲルマニア貴族と言うと角が立つと思い、商人として村長に交渉。

維持費に困っていたらしく喜んで手放した。

領主にも謝礼としていくらか払ったのでトラブルになることはないだろう。

俺は銃とエンジンの二つの班に分けて作業させることにした。

銃はひとまずリボルバー銃の生産を目指す。

レンコン状の回転式弾倉とシングルアクションと雷管の概要を説明する。

一方、エンジンは仕組みの解析と化石燃料の製造を目指す。

エンジンという概念が無いこの時代にエンジンをいきなり製造するのは不可能と考え、

長期的な視点で研究を進めていく。

せめて原作の戦争開始までには実用化を進めたいが…無理だろう。

一十一歳一

研究・開発は順調に進みいくつか成果を上げている。

化石燃料はゼロ戦に残っていたため、それを元にして同じ成分を作
ることに成功したようだ。

リボルバー銃は開発より一年後に試作品が完成、さらに三カ月後に
実用化が可能となった。

次に俺はライフル銃の開発を始めた。

ボルトアクション方式を採用し、何より使いやすく壊れにくい銃に
することを伝えて開発をさせる。

この銃の開発にもも相当な期間がかかりそうだから、

その間に他のこと進めることにする。

「アーベル領の税収が上昇しました」

「そうか！上手くいったか」

農業政策より二年。

ようやく結果が出たようだ。

劇的に上昇するものでもないが、アーベル領は広いため少しずつの
積み重ねが大きな結果に繋がる。

年々上昇していけば無視できない数字になるだろう。

アーベル商会は設立より成長し続け、利益を投資に回すということ
を続けたため、

ギルドの中でも売上はトップとなった。

ギルドの幹部や取引相手は喜んでいるが、同業者はあおりを受けて
廃業したものも多い。

しかし、アーベル商会の拡大には人手が必要であり、そういった人
物を探して雇用している。

商売の経験者というのは必要な人材であるし、アーベル商会の悪口
を流されるのは困る。

このようにして敵を作らないようにして、アーベル商会は規模を広
げていった。

一十二歳一

リボルバー銃の生産が進み充分な数を揃えられるようになった。

これに合わせて領地では平民は徴兵による軍隊ではなく、

職業としての軍隊を確立することにする。

いわゆる常備軍というものである。

軍隊というものは金がかかるが、平常時は治安維持をさせればいい。しかしこれには問題がある。

まず俺が軍事にあまり詳しくないこと。

そして軍部が反対する可能性が高いこと。

この二つである。

家臣たちにも戦争に詳しい人は居なかったため、ひとまず父に相談してみる。

「常備軍の設立か…」

「はい。ですが平時は治安維持もしますし、税収も増えてきたので予算の問題はないかと」

「軍部には話を通しておくから自分で説得しなさい」

「分かりました」

予想通り俺の提案は軍部の反対にあった。

軍部は常備軍そのものに反対しているのではなかった。

俺の考えるメイジと平民が連携する軍隊というものに反対しているようだ。

しかし、平民と肩を並べたくないという理由ではなく、そもそも平民がメイジと連携できないと思っているようだ。

軍部の話をよく聞くと、ハルケギニアではメイジ一人に対して平民は十人必要であるというのが常識らしいのだ。

しかもメイジは固定砲台のような運用の仕方、平民はメイジの盾となることが多いらしい。

（これは軍隊の常識をひっくりかえさないといけないな…）

そう感じた俺は論より証拠ということで、

明日の昼にオーク狩りに行くことを軍部と約束した。

俺はすぐに家臣たちを集めてリボルバー銃の扱い方をみっちり仕込んだ。

そして翌日の昼。

俺と家臣たちと軍部は領地のオークの巣に向かう。

「ここからは全員俺の指揮下に入ってください。

まず風メイジを斥候として進んで行きます。

斥候はオークの数を確認したら速やかに戻ってください」

歩くこと十数分。

斥候からオークが十匹ほどいるとの報告を受ける。

「それでは風のメイジはサイレントを使って我々の音を消してください。」

その他の者たちは俺の合図で動けるように準備してください」

これによりオークたちに悟られることなく近づくことができた。

「リボルバー部隊射撃開始！」

この合図により家臣たちが銃でオークたちを狙撃する。

急に攻撃を受けたオークたちはパニックに陥る。

サイレントのおかげでほぼ無音での攻撃。

気付いてみればいつの間にか自分たちの体に穴が開いているのだ。

何匹かこちらに気付いてこちらに向かってくる。しかし、

「アースハンド」

俺の魔法で足止めをする。

そのまま射撃を続けると、オークが全員倒れる。

「リボルバー部隊射撃終了！」

しかし何匹かはまだ息があるのか手足がピクピクと動いている。

「火のメイジの人は…って」

俺は軍部の人たちを振り返るが哑然としている。

「火のメイジはオークを焼却！」

我に返りあわてて火のメイジたちがオークを魔法で焼き尽くす。

「これにてオーク退治は終了。帰還する」

あらためて軍部と話し合う。

「さて…軍の再編をしたいんだがどうだ？」

「……異論ありません」

「細かい部分はお前たちに任せることになるからな。現場のことは頼む」

こうして常備軍ができあがった。

そこで余った税金で公共政策を実施した。

一つ目は役所の設置。

これは戸籍の作成や政策の公布に役立つ。

また目安箱を設置し、平民目線からの意見を募集する。

二つ目は保育所と学校の創設。

保育所は子どものいる女性でも働けるし、

学校は平民を知識階級に育て生産力を上げる。

ちなみにどちらも完全無料である。

三つ目は道路整備。

これは鍬の無料貸与の代わりに描かせた地図を利用する。

主要な街道を優先的に整備。

これは土メイジを大量に雇用したため、かなり費用がかかった。

四つ目は衛生管理。

殺菌・消毒の概念や汚物の処理方法を広め、

公衆浴場を設置して感染症のリスクを減らす。

水メイジを雇用し病院を開設。平民でも払える金額で怪我を治せる。

結論から言うとその政策は成功した。

しかしこれを引き金に余計なトラブルを抱えるとは思ひもしなかった。

一十四歳一

「他の貴族から苦情が殺到？　どういふことですか父上」

「いや、それが……ここのところ他の領地からアーベル家に向かう平民たちが急増しているようだな…。

他の貴族から対応策を迫られているんだ」

ここのところっていうことは……公共政策のせいかな！

やりすぎたかと少し思う一方、他の貴族の領地経営が悪いのではないかなと思う。

俺の経営は前世を基にしたものだから卑怯かもしれぬが。

「あともう一つ」

「今度はなんですか？」

もはや何でも来いといったヤケクソな気分だ。

「閣下が直々に会いたいと」

「マジ勘弁!!」

動揺のあまり前世の言葉が出てしまった俺である。

「本日はお集まりいただき誠にありがとうございます」

型通りの挨拶をする。

集まっているのはゲルマニアの貴族たち。

人数多すぎたため、王宮の会議室を借りている。

ゲルマニアの貴族のほとんどが揃っているのでは…?

それだけアーベル家が嫉妬されてるということだ。

今度から気をつけよう。

「本日の用件は他でもありません。

皆様とビジネスパートナーとして協力したいのです」

途端にざわつく貴族たち。

大方、賠償金の計算でもしていたのだろう。

俺は無視して話し続ける。

「こちらの書類に目を通してください」

そう言って、ギルドに渡したものと同じ書類を渡す。

「私の領地で行っている事業の計画書の譲渡と人材の貸与を行います。」

売上の3%は手数料としていただきますが」

いわゆるフランチャイズの申し出というものである。

お詫びという建前を保つために上納する金額も少なくしている。

フランチャイズで売上3%というのは格安である。

「この申し出に異存のある方は？」

結局、すべての貴族がこの申し出を受け入れた。

「ベンノ、お前は面白いな」

「恐縮でございます」

あの後、アルブレヒト3世の使いに謁見室に連れてこられたのだが、

何故か俺を気に入ったらしい。

「先ほどの貴族たちの顔など見ものであったぞ」

「見ていらっしゃったのですか？」

「うむ。それで本題に入るが、お前は面白い物を研究しているらしいな」

一瞬ドキリとするが正直に言う。

「ご存知でしたか」

「リボルバーといったかあの銃。

あれがあれば軍の強化に繋がるからな」

リボルバー銃を売れてることか…。

「わかりました。手はずを整えておきます」

「これからもゲルマニアに貢献してくれ」

「はい。必ずや」

（予想していた以上に恐ろしいな）

俺はそう思いながらながら謁見室から出た。

夕食の後、俺は唐突に両親に頼み事をする。

「父上、母上お願いがあります。トリステイン魔法学院に通わせてください」

「どうしてトリステインなのだ。ゲルマニアでは駄目なのか」

流石に原作知識が…と正直に言えない。

その代わりにもっともらしい理由を述べる。

「色々なものに触れ、見識を深めたいと思います。」

そのためには外国へ行ったほうがいいかと

「領地のことはどうするのだ」

「それに関しては問題ありません」

俺の領地経営が成功していくとともに新しい家臣たちが増えてきたので、

古参の者たちをトップにすえて「諜報」「内政」「軍事」「商業」「開発」の五つに分けて動かしている。

重要なことは俺が判断しなければならぬだろうが、維持していくだけならば俺がいなくても可能だ。

「ふむ、それならはいだろう」

「ありがとうございます」

俺は許可が出たことに一安心する。

「ちゃんとお嫁さんを見つけてくるのよ」

「……善処します」

第四話

一十五歳一

「ふわゝあ」

俺はあくびを噛み殺す。

トリステイン魔法学院の入学式の最中なのだが、退屈すぎるのである。

周りを見渡してみると青の髪の少女と赤の髪の少女が揉めている。

（アレがタバサとキュルケか…）

容姿も性格も正反対な二人。

その二人が親友となるのだから実に人間は面白い。

「その二人！今、先生が大切なお話をされているのよ！静かにしなさい！」

（大切でもないし、一番うるさいのはお前だ）

と思いつつ、声を荒げる少女を見ると見事なピンクの髪。

（ルイズか…やはり性格はきついみたいだな）

原作知識を利用して手駒と資金を増やすためにわざわざトリステイ

ン魔法学院に入学しただけである。

原作キャラを確認すると教師に体調が悪いと言って俺はそそくさと出て行った。

部屋に戻りローブを脱ぐ。

このローブは高級素材で出来ているが、それほど強い素材ではない。

「錬金」

ローブをケブラー素材に錬金する。

これで強度と耐熱が大幅に上がる。

再びローブを着て装備の確認をする。

両手にはまった銀の腕輪。

これは一見アクセサリにしか見えないが、

予備の杖として契約を済ませている。

懐に忍ばせている短刀とスローイングナイフ。

これは自分が錬金で作った武器であり、

ダイヤモンドで強化した上に、固定化を何度もかけている。

それとリボルバー銃と予備の銃弾。

全て確認し終わると俺はトリステニアに向かった。

俺はトリスタニアに着くと、裏口からある店に入っていく。

「やあ、調子はどう…って見たら分かるね」

「ベンノ様！何か御用で？」

「いや、見に來ただけだから。気にしないで」

「わ、分かりました」

いそいそと店に戻っていく。

何をしに來たのかというと、トリステニアに出店した直営店の視察である。

フランチイズの際にトリステニアにも出店していたのだ。

無論、トリステインの貴族にいくらか上納している。

（同じ失敗を繰り返すのは愚かだからな）

ゲルマニアでの失敗にはこりごりである。

一見ただけで分かるが、なかなか繁盛している。

今も身分の高そうな貴族が大人買いしている。

トリステインにはゲルマニアと違って、貴族向きの店しか出店していない。

トリステインの平民の経済力は小さくあまり期待できない。

そんなことを数回繰り返した後、俺は裏道を通っていく。

そしてたどりついたのが武器屋。

店に入ると店主が何か言ってくるが無視して目的の物を探す。

「ディテクトマジック」

明らかに異質な剣。

「インテリジェンスソード…？」

「あ？おめえメイジだろ。剣なんていらねーじゃねえか」

流石に知っていてもしゃべる剣っていうのは不気味だな。

「魔法は完璧じゃないからね」

「おでれーた！おめえ変わってんな」

このやり取りも懐かしい。

「店主、この剣いくらだ？」

「へ、へえ。百エキュで結構でさあ」

俺は百エキュを支払い店を出る。

「おめえ腕はそこそこのようだな。名前は？」

「ベンノだ。よろしくなデルフ。」

残念なことだが非常時以外は部屋で寝てもらおうから」

「ひでえ!!！」

学院生活が始まったわけだが、俺は男女かまわず色々なグループに首を出している。

というのもコネと根回しの重要性を身をもって体験したためである。

相手の話を引き出して、大体の領地の状態を掴む。

アーベル商会が金を貸している貴族も多い。

危なくなったら貸し剥がすことも検討に入れる。

その後、いい話を聞けたと言ってアーベル商会の招待券を渡す。

まあ招待券といっても実質は割引券であるが。

男には飲食店。

女にはアクセサリー店。

こうやってトリステイン貴族に俺の名前を売っておく。

将来、事業を拡大するときに役立つだろう。

俺が交友関係を広めていく中、孤立しているメンバーがいる。

キュルケ、タバサである。

キュルケは入学早々に男子生徒を何人か誘惑、しかも彼らにはすでに彼女がいる。

男子の評価は悪くないが、女子の評価が最悪である。

タバサはロレーヌに決闘を仕掛けられ、逆にボコボコに仕返したらしい。

普段も無口なため、陰でどこかの貴族の私生児ではないかと言われている。

全く違う理由で孤立している二人であるが、全く気にしていないという点で共通している。

（魔法の上手い女性は芯が通っているのだろうか）

そんなことを考えながら観察を続ける俺であった。

いつものように話をしていると、最近ある話題が多くなったことに気づいた。

新人生歓迎の舞踏会である。

今もどんな服装で行くのかということで盛り上がっている。

特に興味がないが、キュルケとタバサのイベントが起こるはずである。

アーベル商会に服をオーダーして参加することに決めた。

―舞踏会の日―

豪華な飾りつけ、贅沢を尽くした食事。

見事な舞踏会と言えるだろう。

新入生たちは浮かれておりどこか落ち着きがないが、

キュルケだけは別格であった。

見事なプロポーションを映えさせる扇情的なドレス。

堂々とした態度はまさに女王であった。

女子生徒たちはケチをつけているようだが、

どう考えても負け犬の遠吠えでしかない。

（格が違いすぎる…）

おそらく生まれと環境が違うのだろう。敵う相手ではない。

思考を切り替えて辺りを見渡す。

やはりコソコソと動いている奴らがいる。

が、俺が動くまでもないので放置しておく。

しばらくするとつむじ風がキュルケのドレスを下着ごと切り裂いた。

俺はテーブルクロスを鍊金してローブに変えて、レビテーションをかけてキュルケにまとわせる。

それを見届けるとさっさと舞踏会を後にした。

—その日の深夜—

広場で時間潰しも兼ねて魔法の練習をしていると二人の少女が現れた。

「キュルケとタバサか」

予想していたことだが白々しく言う。

「あら、ミスタ・アーベル」

「ベンノでいいよ。それにしても俺の事知ってたんだ」

「ゲルマニアであなただけを知らない人なんて居ないわ。

これからのことを邪魔する気ならあなたでも容赦しないけど」

「いや、邪魔する気はないよ。立会人でもしようかなと思って」

「それなら構わないわ」

「タバサもそれでいいかい？」

「……コクン」

かすかにうなずいたようだが、イマイチ分かりづらい。

「それじゃ二人とも構えて…始め！」

「エア・カッター」「ファイアー・ボール」

詠唱はほぼ同時。あとは威力だが…相殺したか。

流石トライアングルだな…と考えると二人ともすでに決闘を止めている。

誤解に気づいたか。あとは…

「アース・ハンド」

陰に隠れて覗いていた黒幕たちを引きずり出す。

「へえ…あなたたちだったの。覚悟はできているんでしょね」

「仕返し」

ロレーヌと女子生徒数名はキュルケの炎とタバサの風によってボロボロになって、逆さ吊りにぶら下げられた。

彼らは翌朝に発見され学院で騒ぎになったが、自分自身にやったと奇妙な証言をしており、真実は闇の中に葬られた。

この事件後、俺はタバサ・キュルケと多少話をするようになった。

といっても親しくなったわけではなく、ワンオブゼムから個人として見られるようになったただけであろうが…。

第五話

しばらく授業を受けていればわかるが、ここの教師たちは無能だ。

いや、教育体系が悪いと言わべきだろうか。

教師は全員トライアングル以上なのだが、教え方が稚拙。

生徒の人数が多すぎて効果的に教育できないし、違う系統がごっちゃになって学ぶってどうよ？

俺は授業に見切りをつけ、授業をさぼったり、授業に出席しても領地の報告を読んでその対策を考えていた。

今日は授業をさぼり、トリステインの貴族のリストを作っている。

それぞれの貴族への貸付額と財政状態をまとめている。

多くの貴族がリストに書かれているが、モンモランシ家とヴァリエール家の名前はない。

モンモランシ家には貸せるほどの信用がなく、ヴァリエール家は借りる必要がないのである。

その二つの貴族を除くと、トリステインの経済状況は次のように分析できる。

アーベル商会の銀行で金を借りて、アーベル商会の店で金を落とす。

このおかげでトリステインの景気が良くなっている。

もちろんこのバブルはいつかはじけるだろうが。

あの騒動から特に何もなく学院生活は進んでいったのだが、

授業で実技を使われるようになるがあるとある少女が馬鹿にされ始めた。

ルイズである。

どんな魔法も爆発させてしまい成功したことがない。

魔法の成功率ゼロ。それゆえにゼロのルイズという二つ名がつけられる。

虚無だから仕方のないことなのだが周りは知らないだろうし、俺も言うつもりはない。

ゲルマニア嫌いだから相手にされないだろうし、第一俺にメリットがない。

化けの皮がはがれればあとは終わりである。

公爵家令嬢ゆえの驕りとワガママな性格のせいでどんどん人が離れていき、

タバサやキュルケと同じように孤立してしまった。

そして運命の日が訪れる。

一春の使い魔召喚の日――

召喚は何事もなく進んでいく。

原作通りキュルケはサラマンダー、タバサは風竜（実は風韻竜だが）を召喚した。

そして俺のターン！

「我が名はベンノ・フォン・アーベル。

――五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし『使い魔』を召喚せよ」

真理の扉：ではなく鏡に似たゲートが俺の目の前に現れる。

そしてゲートを突き破ってきたのはドラゴンだった。

「ベンノがドラゴンを召喚したぞ！」

「すごいなあ……」

クラスメイトたちが感心している。

体の色が茶色いから地竜だろう。

魔力は…それほど高くない。

おそらく地韻竜ではないな。

いや、ドラゴンを召喚しただけですごいんだが。

「我が名はベンノ・フォン・アーベル。

——5つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

俺は懷に手を入れ短刀で指に傷をつけて、ドラゴンの口に血を含ませる。

ドラゴンとキスする趣味はないからな。

首にルーンが刻まれる。

このルーンは後で調べることにして、

えーと、名前どうしよう。

そんなことを考えていると爆発音が響き渡る。

（ルイズの召喚が始まったな…）

何度か爆発音がした後、使い魔が召喚される。

その姿を見て、俺は呟く。

「おはよう同胞。ここからは異世界物語（ゼロ魔）だ。」

「あんた誰？」

「俺は平賀才人。ってここはどこだ!？」

「ヒラガサイト? 変な名前。」

「アンタ平民が貴族にそんな口利いても良いと思っているの?」

「貴族? そんなモンしらねえよ!」

「つたく、どこの田舎から来たのよ!」

「田舎? 東京はこんなド田舎じゃねえ!」

「トーキョー? なにそれ。どこの国?」

「日本」

「なにそれ。聞いたことない」

そのやりとりを聞いて周りの生徒たちが騒ぎ出す。

「ルイズが平民を召喚したぞ!」

「なっ！ちょっと間違えただけよ！」

「間違いつて、ルイズはいつも失敗じゃないか」

「さすがゼロのルイズだな！！」

埒が明かれないと思ったのかコルベールに近づく。

「もう一度召喚させてください」

「この儀式は伝統であり、召喚したものを使い魔となすのがルールなのだ。例外はない」

「でも、コルベール先生。人を使い魔にするなんてそんな話聞いたことがあります」

「何度も繰り返してやっと成功したのだ。はやく契約を済ませたまえ」

ルイズが向き直る。

「感謝しなさい。平民が貴族にこんなことされるなんて一生無いから」

「えっ？」

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。」

——5つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使

い魔となせ」

ルイズが平民にキスをする。

：キスしなくても契約できるんだがな。

「いきなり何するんだよ！ってアツツ」

「ルーンが刻まれてるだけよ」

「だって：！マジいてえ！：！」

コルベールが近づいてルーンを確認する。

俺も便乗してルーンを覗き込む。

うん。ガンダールヴだね。

それを確認すると俺はドラゴンに飛び乗り学院に帰る。

「よし、お前の名前はズメイに決まりな！」

「ガウ」

学院に着くとまず厨房に行く。

「あの一」

声をかけるとメイドが出てくる。シエスタだ。

「なんでしょうかベンノ様」

「ドラゴンを召喚したから餌をやって欲しいんだけど」

「あ、はい。かしこまりました」

「んじゃ、とりあえずこれ餌代。」

これで一ヶ月くらいは大丈夫だと思うからよろしく」

お金を渡して厨房を出る。

おそらくだがここでの平民からの俺の評判は悪くないはずだ。

チップは多目に払うし理不尽も言わない。

さりげなく感謝の言葉も混ぜているので、他の貴族に比べれば数段マシである。

評判が悪いとサイトとの接触が難しいという理由もあるが、

俺は貴族と平民を雇用者と被雇用者の関係で捉えている。

（ここまで来ると単なる経営バカだな）

俺はそう思い苦笑した。

第五話（後書き）

ズメイっていうのはスラヴ神話のドラゴンのことだったと思います。
これから原作開始ですね。

第六話（前書き）

第一話から第五話を改編したので、できればそちらを読み直して第六話を読んでください。

第六話

いつものように朝食をとっていると、

「ん？あれは…サイトか」

ルイズに従えられたサイトが床に座ってスープを飲んでいる。

（あれはひどいな…）

死ぬことはないだろうが、現代っ子にとってはきついだろう。

そういえば原作でも色々『騷』を名目にして虐待を受けていた気がする。

（ふむ…その辺りからアプローチしてみるか）

何しろサイトはガンダールヴである。

ぜひとも配下に欲しい。

と言っても戦力としてそれほど期待しているわけでもない。

重要なのは手にした武器の情報を理解できること。

これを利用すると兵器の開発が格段に早くなる

そんなことを考えながら食事を終え、授業に向かった。

いつものように授業中に経営のことを考えていたが、教室の様子がおかしい。

（ん…なんだ？何が起こっている）

前を見るとルイズとシュヴルーズ先生だ。

（あっ！まさか…）

俺は素早く荷物をまとめ部屋を出る。

いつも一番後ろの席に座っているから抜け出すのは簡単である。

俺が部屋を出ると同時に

「ドッカーン！！！」

大きな爆発音。

教室を覗いてみると、シュヴルーズ先生は倒れて教室はボロボロ。

使い魔たちが暴れて阿鼻叫喚といった感じだ。

（ふう…助かった）

授業は休みとなったので俺は内心喜んだ。

—とある昼下がり—

ヴェストリの広場が騒がしい。

周りの生徒たちに事情を聞く。

「騒がしいようだが何があったのか？」

「ギーシュとルイズの使い魔が決闘するらしいぜ！」

そういえばそんなイベントもあった気がする。

ガンダールヴの実力を見てみるか。

「諸君！ 決闘だ！」

ギーシュが声を上げる。

「逃げずに来たことは褒めてやろうじゃないか。

もう一度聞く。頭を下げる気はないのかね、平民」

「うるせえ、さっさとしろ」

ギーシュがゴーレムを作り出す。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。まさか文句はあるまいね？」

「てめえ…」

それからは一方的にサイトがやられる。

そこへ騒ぎを聞きつけたルイズが割って入る。

「いい加減にして！大体、決闘は禁止されてるじゃない！」

「禁止されているのは貴族同士の決闘のみだ。平民と貴族の間での決闘なんか、誰も禁止していない」

「はっ・・・こんな攻撃効いてないぜ」

サイトよ。フラフラになりながら言っても説得力がないぞ。

ギーシュが剣を作ってサイトの足元に投げる。

「まだ闘う気があるならその剣をとりたまえ」

「止めなさいサイト！それをとったらギーシュは手加減しないわ！
！」

「使い魔でいい。寝るのが床でもいい。飯はまずくたっていい。下着だって、洗ってやるよ。生きるためだ。しょうがねえ」

「でもな…下げたくない頭は下げられねえ！」

サイトが剣を取るとルーンが光る。

それからの才人の動きは人が変わったようだった。

ゴーレムが瞬時に切り裂かれて土に還る。

ギーシュは慌ててゴーレムを作るが、またも一瞬でゴーレム達はバラバラに切り裂かれる。

この決闘はサイトの勝利に終わった。

—最初の虚無の日—

今日はサイトとルイズが剣を買う…ということになっているが、

よく考えるとデルフリンガーは俺の手元にある。

それはどうでも良いとして、フーケの事件もあったな…。

深夜なので今のうちに寝ておこう。

そして夜。

ルイズたちが広場に行ったのを確認すると、

ズメイに乗って学院を出てしばらく待つ。

学院からフードをかぶった人物が出てくる。

（アレがフーケだな…）

それを確認するとズメイに乗り、気づかれないように尾行した。

しばらくするとフーケが森の中に入る。

ズメイに森の上で待機するよう指示を出して、こっそり森へ入っていく。

「しかし…破壊の杖って言ったつけコレ？どうやって使うんだろうねえ…」

フーケがぼやいている。

どうやら使い方が分からないようだ。

にしてもいつもと口調がだいぶ違うなあ…。

「買い取ってあげようかそれ？」

俺は気軽に声を掛ける。

「何者だ！？」

フーケは突然のことに驚いたようだ。

杖を持ってこちらに敵意を向けてくる。

「敵意は無いんだけどなあ…」

俺はホルドアップのままフーケに近づいていく。

無防備すぎるかもしれないがフーケは殺人を好まない。

腕輪もあるし。

「へっ！ってアンタは学院の…アーベルだっけ」

「ベンノでいいよ」

「で？何が目的だい？」

意図が分からないのかますます敵意を向けてくる。

「さっき言っただろ。それを買収するって」

「アンタこれの使い方が分かるのかい！？」

「使い方は分らん。しかし価値は知っている」

「買収した後、裏切ったりしないだろうねえ…？」

裏の世界に通じているためなのか用心深い。

「流石にそんなことはしない。フーケと取引したなんてばれると、こっちだって困る」

「へえ…。で、いくらで買収してくれるわけ？」

「五百エキュでどうだい？」

「それじゃ安いねえ…千エキュ」

値段を吊り上げてくる。しかし、

「分かった。千エキュだな」

俺はあっさり了承し、懷の中から手形を取り出しフーケに渡す。

「ああ…確かに千エキュ頂いたよ。」

ほら、コレが破壊の杖さ」

そう言って破壊の杖…もといロケットランチャーを渡してくる。

それじゃと言って足早に去ろうとするフーケに慌てて声をかける。

「あ…ちょっと待って。俺の領地で働かないか？」

「はあ…？アンタ盗賊を雇うつもりかい？」

「才あるものは使うべきだよ。無論、給料は今よりも出す」

「…いいよ、その話乗ってやる」

第七話（前書き）

この話は没になりました。
新七話からお読みください。

第七話

翌朝、トリステイン魔法学院では大騒ぎになっていた。

すべての授業は休講になり、目撃者であるルイズ・キュルケ・タバサ・サイトが会議に呼ばれていた。

教師たちは会議とは思えないただの責任の擦り付け合いをして、当直だったミセス・シュヴルーズに非難が集中した。

しかしそれをオールド・オスマンが教師全員に責任があると言って、結局うやむやにして目撃者に事情を聞く。

「詳しく説明したまえ」

ルイズが一步前に出る。

「はい。大きなゴーレムが現れて、ここの壁を壊したんです。肩に乗っていた黒いメイジがこの宝物庫から何かを盗み出した後、

ゴーレムで逃げました。そのあとすぐに周りを探しましたが、どこにもいませんでした」

「後を追おうにも、手がかりはないわけじゃな……時に、ミス・ロングビルはどうしたのかね？」

「それが、その……朝から姿が見えませんが」

「この非常時に、何処に行ったのじゃ？」

オールド・オスマンらが話をしていると、ミス・ロングビルが唐突に現れた。

「ミス・ロングビル、何処に行っていたのですか!？」

「申し訳ありません。今朝方、起きてみたら大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はあの通り。」

すぐに壁のフーケのサインを見つけたので、すぐに調査を開始しました」

「仕事が早いもう、ミス・ロングビル」

「で、結果は？」

「はい。フーケの居場所が分かりました」

「な、何ですと!？」

コルベールが驚愕の声を上げる。

「誰に聞いたんじゃない、ミス・ロングビル？」

「はい。近在の農民に聞き込んだ所、近くの森の廃屋に入った黒尽くめのローブの男を見たそうです。」

恐らくは彼がフーケで、廃屋がフーケの隠れ家ではないかと」

「黒尽くめのローブ?それはフーケです!間違いありません!」

ルイズが反射的に断言する。

「すぐに王室に報告しましょう！王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し向けて貰わなくては！」

教員の一人が提案する。だが、オールド・オスマンは首を横に振り、口にした教員を怒鳴り付けた。

「馬鹿者！王室に知らせている内にフーケは逃げてしまうわ！これは魔法学院の問題じゃ！」

オールド・オスマンは軽く咳払いをし、この場の全員に向けて視線を巡らした。

「搜索隊を結成しよう。我はと思う者は、杖を掲げよ」

だが、教員達を含めて杖を掲げる者は一人もいない。しかし、ルイズが一人杖を掲げた。

「私が行きます！！」

「ヴァリエールが行く以上、私も黙ってはいられないわね」

不敵な笑みを浮かべながらキュルケが杖を掲げる。

タバサも杖を掲げる。

「あら、あなたも行くの？」

「心配」

「では、君達に頼むとしようかのう……」

「オールド・オスマン、正気ですか!？」

「彼女達は敵を実際に見ておる。その上、ミス・タバサは若くしてシュヴァリエの称号を持つ騎士だとも聞いておるが？」

シュヴァリエ。王室から与えられる爵位としては最下級だが、純粹に武勲に対してのみ与えられる爵位である。

教師は騒然とし、またルイズやキュルケもタバサを見て驚いている。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアで優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、

彼女自身の火の魔法もかなり強力であると聞いておるが？」

「ミス・ヴァリエールは……その……トリステイン王国筆頭貴族の三女で、あー…将来有望なメイジじゃ。」

しかも、その使い魔はドットではあるがメイジに勝ったと聞く」

「しかし、やはり生徒だけで行かせるのは………」

「ならば、この三人に勝てると思うものは前に一步出たまえ」

オスマンは教員らを見回した。

「おらんのか？　そうか、ならば魔法学院は諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

「「杖にかけて！」」

三人が横一線にならんで貴族の礼をした。

「では、馬車を用意しよう。ミス・ロングビル、彼女達を手伝ってやってくれ」

「元より、そのつもりですわ」

「手綱なんて付き人に持たせれば良いのに……」

「良いですよ、ミス・ヴァリエール。私は貴族の名を失くした者ですから」

「でも、貴方はオールド・オスマンの秘書なのでしょう？　貴族の名を失くしたって……」

「ええ。でも、オールド・オスマンは貴族や平民と言う事に余り拘らないお方です」

「差し支えなかったら、事情をお聞かせ願いたいわ」

キュルケが興味本位にロングビルへと尋ねる。しかし、

「キュルケ、止しなさい」

「何よ、ルイズ？」

「貴方のお国じゃ知らないけど、聞かれたくない事を無理に聞き出すのはトリスティンじゃ恥ずべき事よ。」

興味本位で人の過去を暴こうとするのはどうかと思うわ」

ルイズに言われ、流石に悪い事をしたと思ったのかキュルケも口籠る。

そんなことをしていると森のそばに着いた。

「さて、ここからは徒歩で行きます」

しばらく歩くと小屋が見えたので作戦を立てる。

サイトが偵察兼囃として小屋へ向かい、他の者たちはサイトがフリーケを外に連れ出したとき、

集中砲火でフリーケを倒すというものに決まった。

サイトは慎重に小屋に近づき様子を探る。

サイトは誰もいないことを確認し、合図を送る。隠れていた全員がおそろおそろ近寄ってきた。

ロングビルは近くに誰かいないか偵察してくると言って小屋から離れ、

ルイズは見張りを買って出ため、残りの三人で小屋の中を搜索する。

「あった」

タバサは無造作にそれを持ち上げ、二人に見せた。

「あっけないわねえ」

そのとき、外で見張りをしていたルイズの悲鳴が聞こえたので急いで小屋から出る。

タバサは破壊の杖を放り捨て、自分の杖を振るうと、巨大な竜巻がゴーレムを襲う。

しかし、ゴーレムは竜巻の直撃に耐え、削られた部分を再生させる。続いてキュルケが炎を放ち、ゴーレムを火ダルマにするも、やはり効果はない。

「退却」

三人は慌てて逃げる。

しかし、ルイズはゴーレムに魔法を放ち、ゴーレムの表面に小規模な爆発が起こるが、

表面を削るだけでダメージを与えることはできない。

サイトは足を止め叫ぶ。

「逃げるぞ！」

「いやよ！あいつを捕まえて皆を見返すの！もう、誰にもゼロのルイズなんて呼ばせない！！」

「馬鹿言ってんじゃねえ！！」

「魔法が使えるから貴族なんじゃない！敵に後ろを向けない者を、気高き誇りを持つ者を貴族と言うのよ！！」

そう言ってゴーレムの足元に向かい破壊の杖を手取る。

ルイズは集中したり破壊の杖を振り回したりするが、一向に何も起こらない。

ゴゴゴゴゴゴゴ……

急に大きな音とともに巨大な壁が出現し、ルイズとサイトたちは分断された。

第八話（前書き）

この話は没になりました。
新七話からお読みください。

第八話

（ほぼ予想通りだ）

俺はフーケとルイズたちの動きを見ながらそう思った。

ちなみに俺は仮面をかぶり、平民の格好をしてその様子を隠れて見ている。

「魔法が使えるから貴族なんじゃない！ 敵に後ろを向けない者を、気高き誇りを持つ者を貴族と言うのよ！！」

ルイズが叫んだセリフを聞いて俺は苦笑する。

（気高き誇りねえ…それは平民を足蹴することも含まれているのかね）

サイトへの扱いから考えて、お世辞にも気高き誇りを持っているようには見えない。

あるのは貴族特有の傲慢だけ。

だが、その方が都合がいい。

俺は作戦通り進んでいくことを確認すると、ルイズとサイトたちの間に壁を作る。

地面をそのまま壁に作り変えているだけなので、精神力の消費が少ないためかなり大きな壁が完成した。

そして潜んでいた場所から走り出し、驚いて固まったルイズの延髄に剣の柄で一撃を食らわす。

「ギャッ」

とルイズは悲鳴を上げると気を失いそのまま倒れこむ。

俺はフーケに合図してルイズを回収させる。

そしてそのまま森の奥深くへ逃げ出した。

—side change—

突然、ルイズとサイトたちの間に巨大な壁ができる。

「えっ！」

「ちょ、ちょっとどうなってるのよ」

「俺にも分からん！」

「…壁を壊すべき」

しばらく呆けていたが、タバサの一言で正気に戻り壁を壊そうとする。

キュルケとタバサは魔法を使い、サイトは剣で壁を切りつける。

しかし、壁が予想以上に厚くなかなか壊れない。

そこでキュルケが思いつく。

「そうよ！フライで壁を越えればいいのよ」

キュルケはフライを唱え飛び越えようとする。

だが、タバサがキュルケの袖を引っ張って止める。

「ちょっと！タバサなんで止めるのよ」

「狙い撃ちされる」

キュルケは「あっ」と声を上げる。

確かにフライを使えば壁は越えられるであろうが、

壁を越えた瞬間相手に狙い撃ちされてしまえば終わりだ。

フライの最中は他の魔法が使えないのでいいのだ。

「…それに相手は複数いる」

「えっ！？どういうことよタバサ」

「この壁…フーケのゴーレムと少し毛色が違う。

おそらく相手は二人以上いる。これ以上は私たちでは無理」

「ちょっと待て!! ルイズはどうするんだよ!？」

サイトが声を荒げる。

「……残念だけど」

「すぐに学院に報告すべき」

「チクショウ!!」

キュルケとタバサのセリフに諦めるサイト。

タバサがシルフィードを呼び、それに三人が乗って学院に急いで戻っていった。

—side change—

「それにしても上手くいったもんだね」

フーケがゴーレムを操りながら感心したように言う。

「おや。俺の作戦が失敗するとも思っていたのか？」

「いや、そういうわけではないけど…。

ほとんどアンタの言うとおりになったからねえ」

一回想一（フーケとの取引）

「あ…ちよつと待って。いい仕事があるんだが」

「いい仕事…？何だか胡散臭いねえ」

「成功すれば報酬として一万エキュー払うのだが」

「一万エキュー！…アンタどんな仕事をやらせる気だい」

流石に驚くか。まあ、興味を持ってくれて何よりだ。

「学院の生徒を人質にとって金を要求する」

「あいにく私はお宝専門の泥棒でね」

「お宝には違いない。親からすれば子どもは目に入れても痛くない財宝だろうさ」

この時の俺の顔は悪魔のような笑みだったに違いない。

「クックック。アンタ…鬼だねえ。面白そうだし詳しい話を聞かせてもらおうか」

「破壊の杖が盗まれたとすればフーケ討伐隊が組まれるはずだ。

しかし王宮には報告しないだろう」

「なんでさ？」

「あいつらは体面を気にする。こんなことが報告されれば最悪解雇となる。」

事件のもみ消しに走るだろう。そこで誰が討伐に来るかが問題になる」

「学院の教師たちじゃないのかい？」

「あの教師たちにフーケを倒すほどの気概があるとでも？」

「…ないね。あいつらには」

ため息をつきながらフーケは言う。

（教師たちと何かあったんだろうか…）

俺はそんなことを考えながら話を続ける。

「おそらく血の気の多い生徒が来るはずだ。」

そこで事件の目撃者であるルイズたちが志願するはずだ」

「そいつらを人質にするわけか」

「正確にはルイズ一人だ。他の奴は少々面倒だからな」

「それでアタシはどうすればいいんだい？」

「討伐隊をここまで案内して、適当に撒いてゴーレムを操ればいい。」

ルイズは俺が抑えるから、後は合図をすればルイズを回収して撤退してくれ」

「それだけでいいのかい…？ まあ、分かったよ」

一回想終了ー

第八話（後書き）

主人公が犯罪やっちゃったZE☆

第九話（前書き）

この話は没になりました。
新七話からお読みください。

第九話

「結局、破壊の杖は動かなかったねえ」

フーケが笑みを浮かべたままこちらを向く。

「残念ながらあれは俺が作った模造品だ」

フーケが学院に戻っている間に俺が作っておいた偽物である。

見た目は似ているが内部は空っぽである。

ちなみに本物はすでに俺の領地に送っており、武器の研究として役立てるつもりだ。

「ふん…。で、これからどうするつもりだい？」

「人質を適当な場所に隠して学院に戻る。何事もなかったように振舞えばいい」

「公爵家との交渉はアンタに任せていいのかい？」

「ああ…。というよりこちらの要求は今日中に公爵家に手紙で届くはずだ」

「はあ！？アンタ誘拐を成功する前に手紙を出したっていうこと？」

フーケが目丸くしながら驚く。

それに対して俺はこともなげに答える。

「そういうこと。…ここら辺でいいか」

俺はフーケに合図した後ズメイから下りて、木が生えていない場所を選んで小屋を錬金で作ります。

固定化も掛けるがかなり適当なつくりになっている。

「んじゃこの中にルイズを閉じ込めておくから」

「へいへい」

フーケはまだ気絶しているルイズを下ろすとゴーレムを崩して一息つく。

結構長い間魔法を使っていたから疲れたのだろう。

俺はルイズから杖を取り上げると、デルフを抜いて杖に振り下ろす。

「スパッ」

なんて斬れることなく、手がジーンと痺れる。

（うーん、やっぱり固定化を破るのは無理か…杖は適当なところに捨てるか）

と考えていると横からデルフが文句を言ってくる。

「おめえ！ やっと出番があったと思ったらこんなことに使いやがっ

て!!」

「うるさい。使って欲しけりゃさっさと本当の姿を思い出すんだな」
俺はそう言って柄に戻す。

一応部屋の中で素振りくらいはしているが、デルフは相変わらず錆びたままだ。

（サイトに渡すべきか…？いや、今のままではリスクが高いな）

俺は思考を切り替えてルイズの身边を探る。

予備の杖はないだろうが念のためである。

これで抵抗はできないだろうが、ずっと監視しているわけにもいかない。

もし、俺が学院にいないことが露見すると疑われる可能性もある。

そのことを考えると目が覚めても逃げられないようにしておくべきである。

手枷、足枷、目隠し、耳栓、猿轡を錬金で作ると、未だに目覚めないルイズにそれぞれをはめていく。

これで自力で逃げることはできない。

こんな辺鄙な場所に入ってくる人間もいないだろうから、ルイズが逃げることは無理であろう。

レベテーションをかけてルイズを小屋に押し込んだ後、フーケに声を掛ける。

「学院に戻るぞ」

「ちょっと待って。まだ精神力が…」

どうやら俺の予想以上に疲れたらしい。

（スクエアってことはなさそうだな…）

「ズメイに乗って帰るから心配いらんぞ」

「そうかい」

俺たちはズメイに乗り学院に戻った。

—side change—

サイトたちが戻りルイズのことを学院側に伝えると大騒ぎになった。

公爵家の令嬢が行方不明。最悪の場合すでに死亡しているであろう。

討伐隊を派遣した学院は責任を取らざるをえないのだが、学院側が考えているのはいかにして責任を回避するか。

本来ならばすぐにでも王室衛士隊に依頼するべきなのだが、すぐに

王宮に知られることはまずい。

今は筋の通った誤魔化しを考える時間なのである。

だが、その時間もすぐさま終わりをつげることになった。

ノックもせずに学院長室のドアが開けられると、そこにいるのは公爵夫婦。

「オールド・オスマン。ルイズはどこにいるのかね」

公爵が怒りに震える声を抑えながら尋ねる。

「……ミス・ヴァリエールはただ今…行方不明です」

オスマンがそう返答し、事情を説明すると学院長室は一気に地獄と化した。

公爵夫婦の怒りがある程度収まると、オスマンが切り出す。

「ミスタ・ヴァリエールはどうしてこちらに來たのですか？」

「…ルイズを人質に金銭を要求されたのだ」

公爵が懷から手紙を出してオスマンに渡す。

オスマンは目を通すとその内容に驚いて声を上げる。

「み、三日以内に五十万エキュール！しかも受け渡しは使い魔一人

だけ」

これに驚いたのはサイトである。

「え、ええっ！お、俺かよ！！なんで！？」

「分からん…。だがお主がやるしかないがの」

ひとまず公爵夫婦はルイズを救出するために部屋を出て行き、教師たちの処分は保留となった。

—side change—

学院にかなり近づいたが、一緒に帰ってはまずいのでフーケを下ろしておく。

「あー、フーケにやられたことにしておいてくださいね。ミス・ロングビル」

「ええ、分かりましたわ。ミスタ・アーベル」

俺はズメイに乗ったまま学院を乗り越える。

幸い、人がいないのでそのまま下りて自分の部屋にこっそり戻る。

昨日、今日で疲れたのか中途半端な時間だがすぐに寝ることができた。

第十話（前書き）

この話は没になりました。
新七話からお読みください。

第十話

昨日の疲れのせいかもしれないもより少し遅めに目が覚めた。

寝ぼけたままベッドに座っていると、部屋の窓を叩く音がする。

窓を開けるとフクロウが手紙を運んできていた。

よく見るとアーベル商会がトリスタニアに出店している銀行からの手紙である。

急いで中身に目を通す。

内容はヴァリエール公爵家からの融資の申し込みであった。

その額は二十万エキュー。

これは半ば予想していたことだ。

公爵家はハルケギニアでも有数の資産家であろうが、三日以内に五十万エキューを現金で揃えるということは難しい。

美術品や土地などを売り払えば用意できるかも知れないが、それでは確実に期日を過ぎてしまう。

唯一の懸念はクルデンホルフ大公国であったが、間に合うかどうか微妙である。

それに公爵家としても借りを作りにたくない相手だ。

これを除くとアーベル商会しかない。

公爵家は財政的に安定しているため金を貸すには良い相手だ。

現に手紙でも公爵家の評価はかなり高いと書かれている。

しかし、今回はあまりにも額が大きいののでトップである俺の許可が必要なのだ。

俺は一ヶ月以内に返済という条件の下で許可を出した。

この際なのでついでに他の指示も出しておく。

それはトリステイン貴族に対する債権の回収である。

現在、貸付金のあるトリステイン貴族のほとんどが契約した期限を過ぎたままである。

無論、利子が膨らむが「のどもと過ぎれば熱さ忘れる」というのか、贅沢な生活を続けている。

平和が続けばまだマシだが、この後の戦争を考えれば強引にでも回収しておくべきである。

銀行では契約書とともにブリミルの名の下に誓紙を書かせて、担保を税収と個人資産に定めている。

誓紙には期限を過ぎた場合、強制的に差し押さえると書いてある。

おそらく誓紙を前面に押し出せば、無理やりにでも回収できるはずだ。

もしも頑固に断れば、ロマリア神官に賄賂↓異端認定↓人生終了のコンボが決まる。

俺は多少の荒事は許して一ヶ月以内に債権を回収するよう指示を出す。

あと個人的な買い物いくつか注文しておく。

この類のものは俺からすると割高なのだがきつと必要になる。

しかしそれでも合計額を見るとため息をつきたくなる。

（積み立てた小遣いがパアだ…）

ちなみにバリバリ稼いでいる俺だが、基本的に使うお金は親からの仕送りのみ。

配当金や報酬は銀行に預けたままである。

（こんなものかな…）

作業を終えた俺は朝食を取るべく食堂に向かった。

途中でキュルケを見かけたが傍目に見ても覇気がなかった。

単に疲れたのか。それとも、任務に失敗して落ち込んでいるのかは分からないが。

探りも兼ねて声を掛けてみる。

「おはよう、キュルケ。元気がないみたいだけどどうしたんだい？」

キュルケはこちらを向き微笑むが、疲れがにじみ出る。

「あら、ベンノ。おはよう。…少し疲れているだけよ」

「そうか…。あまり無茶はするなよ」

俺はそう言って授業に向かう。

（キュルケたちがこちらに勘付いているなんてことはなさそうだな）

先ほどのやり取りを思い出しながら考える。

万が一、気取られていたら厄介だ。

（どうやら計画を修正しなくても良さそうだ）

俺は計画の第二弾を進めた。

<ハルケギニアの状況>

アルビオン・ロマリア・ガリア…変化なし？

トリステイン…アーベル商会によって少し景気が上向いている。

貴族のほとんどがアーベル商会に金を借りている。

ゲルマニア…アーベル商会により好景気。他国からの平民が流入しており人口が増加。

一部の軍隊にはリボルバー銃が装備されている。

アーベル家…アーベル商会によってGDPが大幅に増加。

平民の識字率が高い。公共政策により平民の人口が急上昇を続けている。

アーベル軍全体にリボルバー銃が装備されている。新兵器も開発中。

<主人公の状況>

実力的には土のトライアングル。しかし、鍊金以外で本気を出すことがないので本人も気づいていない。

学院での交友関係は浅く広い。親しい友人はいない。

性格は計算高く冷静。全体の長期的な利益を求めるタイプ。

第十話（後書き）

教師たちの処遇どうしようかな・・・

第十一話（前書き）

この話は没になりました。
新七話からお読みください。

第十一話

―受け渡し日―

俺はルイズを誘拐した時と同じ様に変装してサイトを待つ。

無論サイトが現れるまで隠れている。

指定した場所は見渡しの良い荒野で、近くの森にオークの巣があり人が住んでいる気配がない。

サイト以外が来ればすぐに分かるであろうし、何も知らない人が通りかかる可能性も低い。

指定した日時は事件発覚から三日後の早朝。

おっと、サイトが来たようだ。

とりあえずサイトの様子を窺ってみる。……荷物を持っているが不審な素振りはない。

俺はズメイに乗りサイトの前に現れる。

「う、うわっ。ドラゴン!？」

「ヴァリエールの使い魔よ。約束の物を渡せ」

「って、てめえがフーケか! ルイズは無事なんだろうな!！」

俺はフーケじゃないけどな。

「心配するな：お前が逆らわなければな」

「チッ：ほらよ」

サイトが渋々荷物を渡してくる。

俺は荷物を受け取ると中身を確認しズメイに乗って去った。

俺はトリステインとガリアの国境にある小さな湖のほとりに下りる。

「遅か：ってどうしたんだいそれは」

フーケがズメイを指差して驚く。

今、ズメイの体は真っ白になっているのだ。

「フーケも手伝ってくれ」

俺はそういいながらブラシを錬金しフーケに一つ手渡すと、ズメイの体を洗い始める。

すると見る見るうちに白い染料が落ちて、茶色い皮が見えるようになる。

使い魔から足がつくのは勘弁だ。

「へえ…まあ雇われてるし仕方ないね」

と言いながらもどこか嬉しそうである。

（まあ…ドラゴンを洗うなんて滅多に体験できないだろうな）

二人で洗ったためかすぐに終わった。

「それで上手くやったのかい？」

「ああ。だが一万エキュなんてなんに使うつもりなんだ」

「…アンタには関係ない話だ」

「そうか…：テファたちに送るにはいささか多すぎるような気がする
たんでね、マチルダ」

フーケの顔色が変わる。

「アンタ…：いったいそれをどこで!？」

「アルビオンのウエストウッド…：とも言えばいいかなあ」

「一体何が目的だ!?!?？」

フーケは殺気立ち、杖をこちらに向けて敵意を向けてくる。

「テファを保護したい…：と言っても信じないだろうね」

「信じられるわけがない!」

「ですよー。でも残念だけどそっちには選択の余地がない」

この状況は俺にかなり有利である。

まず俺がフーケの秘密を知っていること。

そして戦闘になったとしてもこちらにはズメイがいるので俺が勝てること。

フーケは俺に従うしか選択肢が残されていない。

「……テファに手を出したら殺す」

「どうぞ好きに。とりあえずアルビオン…の前に人質を解放しておくか。」

フーケ、ルイズはどこに？」

「そこの木陰にいるけど…もう開放するのかい？」

「ああ…受け渡しの際に余計なことしなかったからな。」

まず宝石は本物と見て間違いない」

俺はルイズに近づいていくが

「やはり臭うな……」

汚物の臭いが鼻につく。

二日に一度は、人質の確認もかねて食事と水は与えていたが、

汚物の処理までする気はなかったのでルイズは汚物垂れ流し状態だった。

俺は顔をしかめながら鍊金で手枷と足枷だけを解く。

ルイズは眠っているのか動く気配がないが、どうでもいいので放置しておく。

運が良ければ家に帰れるだろう。

「いざ、アルビオンへ」

第十二話（前書き）

この話は没になりました。
新七話からお読みください。

第十二話

「アンタ…本当にテファたちに手を出すんじゃないだろうねえ……」

「しつこいなあ…しないって何度も言ってるだろ」

「フン！変なことを考えたらアンタを殺すからね」

「物騒だなあ…つと、あれがテファの家か」

ズメイを近くに下ろして家に近づく。

こちらに気付いたのか家から一人出てくる。

頭を頭巾のようなもので隠しているのでおそらくテファだろう。

俺が小さな声で話しかける。

「フーケ、俺の話に合わせろよ」

「えっ…どういう」

フーケは俺に尋ねるがテファが話しかけてくる。

「あら、マチルダ姉さん。久しぶりね」

「ああ、そうだね」

「ところで…そちらの方は？」

「えーと…コイツはねえ……」

フーケが返事に詰まっているようなので俺が代わりに答える。

「いやー、初めまして。俺はベンノって言います。よろしくお願いしますね」

できるだけ明るく挨拶をする。

第一印象というのは大事であるし、テファは内気な性格である。

こちらが主導権を握ったほうが会話が進みやすい。

「えっと、ティファニアです。こちらこそよろしくお願いします」

どうやら掴みは上手く行ったようだ。

「それで、えっと…ベンノさんとマチルダ姉さんはどういう関係なのですか？」

「あ、それはねマチルダには俺の領地で働いてもらうことになったんだ」

「ええっ！ そうなの？」

テファが驚いてマチルダに尋ねる。

「え、ああ…そうだよ」

マチルダは戸惑うが俺の指示通り話をあわせる。

その代わりすごい目つきで睨んでくるのだが。

「それでティファニアにも俺の領地に来てもらうってことになったんだけど」

それを聞くとテファが落ち込んだような顔をする。

「ごめんなさい。私には…」

「子供たちがいるし、ハーフエルフだから？」

俺が先回りして言う。

「え！あの…：知っていたんですか？」

「うん。でも、俺の領地には保育所があるし、俺はエルフを怖がりしない」

「え…ですが、迷惑になるのでは…：」

確かにエルフを匿うっていうのは俺だけの問題では済まされない。しかし、

「えーと…：はい。この首飾りをつければ姿を変えることができる。

これなら問題ないだろう？」

これは俺が購入しておいたマジックアイテムである。

これで耳を隠せば問題ないはずだ。

「で、でも私は何のお返しもできませんよ…」

（隠れて育ったせいなのか筋金入りの内気だな）

これ以上問答してもしようがない。

「ティファニアが笑っていれば俺はそれで充分さ」

少し気恥ずかしいがこうでも言わないと駄目だろう。

「あ…えとえと……お願いします」

テファが真っ赤になって頭を下げる。

俺は一安心するが、急に背中が寒くなった。

ゆっくり振り向いてみる。

…マチルダからの視線が死線になったような気がする。

（今度はこちらの説得も必要だな）

「ねーねー、このドラゴン触ってみてもいい？」

どうやら家の中にいた子供たちが出てきたようだ。

「うん、いいよ。ズメイ、大人しくしとけよ」

「わーい」と言ってズメイに向かう子供たち。

それを微笑みながら眺めるテファ。

（うーん、平和だ…）

と考えていると、急にひきずられて家の裏に連れ込まれる。

目の前には憤怒の表情をしたマチルダ。

「どういふことか説明してもらおうか」

「……俺の領地で雇うっていうのはテファとマチルダの保護のためなんだ」

「テファはともかくとして私も？」

「公爵家の令嬢を誘拐したからね。学院の教師は解雇になるだろう……もちろん秘書も」

「なるほどねえ…で、テファはどうする気なんだい」

「どうするっていつても、俺の領地で面倒見るよ」

「……まあ良いわ。テファも喜んでるし、とりあえずは信用してあげる」

「そりゃどーも」

―補足―

誘拐計画には大まかに言うと

- ・資金調達

- ・テファとフーケの確保

の二つの目的がありました。

もちろんテファとフーケの確保の方が優先事項です。

新七話（前書き）

頂いた感想などを検討した結果、シナリオを変更することにしました。

そのため第六話の続きから書き直すことにして、その続きを新七話として書きたいと思います。

新七話

学院に戻りながら今後の指示を出す。

「盗賊は辞めて、とりあえずこのまま秘書を続けているろ」

「それだけでいいのかい？」

「機密文書のメモを取って俺に渡してくれればいい」

学院長の秘書ならば表にできない書類を扱ったりするはずだ。

そこまで期待できるものではないが、やっておいて損はない。

「今回の事件のほうは上手く誤魔化しておいてくださいね、ミス・ロングビル」

「分かりましたわ、ミスタ・アーベル」

学院に戻るとロングビルと別れこっそり部屋に戻る。

疲れたのかすぐに眠りについた。

翌日、授業は休講になった。

俺はそれを確認すると手紙を書き始める。

トリステイン貴族に対する債権の回収の指示である。

現在、貸付金のあるトリステイン貴族のほとんどが契約した期限を過ぎたままである。

無論、利子が膨らむが「のどもと過ぎれば熱さ忘れる」というのか、贅沢な生活を続けている。

平和が続けばまだマシだが、この後の戦争を考えれば強引にでも回収しておくべきである。

銀行では契約書とともにブリミルの名の下に誓紙を書かせて、担保を税収と個人資産に定めている。

誓紙には期限を過ぎた場合、強制的に差し押さえると書いてある。

おそらく誓紙を前面に押し出せば、無理やりにでも回収できるはずだ。

もしも頑固に断れば、ロマリア神官に賄賂↓異端認定↓人生終了のコンボが決まる。

俺は多少の荒事は許して一ヶ月以内に債権を回収するよう書いた。

その手紙を出すと一週間の休学届けを提出し、ズメイに乗って領地に戻った。

<ハルケギニアの状況>

アルビオン・ロマリア・ガリア…変化なし？

トリステイン…アーベル商会によって少し景気が上向いている。

貴族のほとんどがアーベル商会に金を借りている。

ゲルマニア…アーベル商会により好景気。他国からの平民が流入しており人口が増加。

一部の軍隊にはリボルバー銃が装備されている。

アーベル家…アーベル商会によってGDPが大幅に増加。

平民の識字率が高い。公共政策により平民の人口が急上昇を続けている。

アーベル軍全体にリボルバー銃が装備されている。新兵器も開発中。

アーベル商会…アーベル家の領地ではほとんど経済を掌握。

ゲルマニアでは売上の2〜3割を占めている。

利益は独占せず周囲に分配しているのでそれほど反感を買っていない。

<主人公の状況>

実力的には土のトライアングル。しかし、鍊金以外で本気を出すことがないので本人も気づいていない。

学院での交友関係は浅く広い。親しい友人はいない。

性格は計算高く冷静。全体の長期的な利益を求めるタイプ。

新七話（後書き）

前のシナリオの構想は大まかですができていたので
シナリオの書き直しがキツイ・・・

新八話（前書き）

第一話～第六話を改編しました

新八話

「お久しぶりです、父上、母上」

いきなりの帰郷に両親は驚いている。

「いったいどうしたのだ。まだ学院は休みではないはずだが」

「領地で気になることがあるので確認しようかと。休学届けは提出済みなのでご心配なく」

「あらあら…てっきりお嫁さんを連れてきたのかと」

「……残念ながらそうではありません」

母にはペースを崩される…。

そこがいいところでもあるのだが。

俺は両親への挨拶を済ませるとすぐに王宮に向かい、皇帝との謁見を願い出た。

「閣下にご協力を願いたいことがあります。トリステインとの同盟を再考していただきたいのですが」

「唐突だな…なぜだ」

「アルビオンでの反乱…これはマジックアイテムによって引き起こされたものです」

「何だと…」

流石に驚いている。

「死者を操ると言われているアンドバリの指輪。これがクロムウェルの元にある限り、この戦争に参加することは無益なものになりましょう」

「だがいずれは戦わなければならん」

「私に考えがございます。このたびの件は任せていただけないでしょうか」

「……分かった。任せる…だが余に全て報告するように」

「はっ」

領地に戻り家臣たちを集めて会議を行う。

「諜報」「内政」「軍事」「商業」「開発」のそれぞれから報告を受ける。

どれも予想とほぼ同じだ。

アルビオンではレコン・キスタが国軍を追い詰め、陥落は時間の問題らしい。

「内政」「軍事」「商業」も上手く回っており、問題はないようだ。目新しい報告はない…と思っていたのだが。

「ふむ…ライフルはもう完成したのか」

もう半年はかかると思っていたのだが、予想外の朗報である。

俺は会議を終わらせて、開発局に向かった。

「ろけつとらんちゃあ…ですか」

「うん。これと同じ物を開発してほしい」

フーケから買い取ったロケットランチャーを見せる。

この武器の量産は難しいであろうが、威力が大きいので使いどころによっては大きな役割を果たす。

俺は一週間で領地を見回り細かく指示を出した後、学院に戻った。

領地にはギリギリまで残っていたので、学院に着くと夜になっていた。

ドラゴンに乗っていたので少々冷える。

（早く部屋に戻って寝よう）

そう思った俺は足早に部屋へ向かおうとするが、誰かが一人でウロウロしている。

侵入者かと思って様子をうかがいこっそり近づくとサイトであった。こんな時間に何をやっているのか知らないが、接触のチャンスである。

「あのー、こんな時間に何をしているのですか」

「あ、え、えっと俺はべつ別に怪しい者じゃなくて…」

そんなに慌ててると余計に怪しく見えるぞ。

「ん？えーと、確か…ミス・ヴァリエールの使い魔じゃなかったっけ」

「ヴァリエール…？ああ、ルイズのことか。うん、そう。俺ルイズの使い魔」

「俺はベンノ・フォン・アーベル。よろしくな」

サイトは目を白黒させている。

平民相手によろしくなんて言う貴族なんて初めてなのだろう。

「ああ…よろしく。俺はサイト。平賀才人だ」

「それでサイトはこんな所で何をしているんだ」

俺がそう尋ねると、サイトはしゃがみこんで小声でぶつぶつ言っている。

「……とりあえず俺の部屋に行こうか」

「要約するとムラムラしてミス・ヴァリエールを押し倒して追い出されたってことか」

「うおおおおお恥ずかしいiiiiiii」

叫ぶなサイト。うるさい。

俺はため息をつきながら言う。

「ソファくらいなら貸すから今夜はここで寝ろ」

「マジか！？サンキュー。良い奴だなっ」

「あと俺の部屋に泊まったことは誰にも言うなよ」

「いいけど…なんで？」

「ミス・ヴァリエールはゲルマニアの貴族を嫌っているからな。」

お前の世話をしたなんて知ったら面倒なことになる」

「分かった」

こうして俺はサイトとの接触に成功した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4334n/>

ハルケギニアの錬金術師

2010年10月8日22時21分発行